手放さないでお仏壇

～我が家に小さなお寺を～

「仏壇じまい」が、普通のようになってしまった時代です。お仏壇があるという意味、お仏壇の果たしてきた役割を、改めて考えてみます。

フリーアナウンサー　桜井一枝（さくらいかずえ）

本誌編集長　菅純和（すがじゅんわ）

仏事の小箱

番外編

亡くなった人が入るのですか

菅　三月二十七日は、「仏壇の日」とされています。これは、天武天皇が六八五年のその日に、「諸国の家ごとに仏舎を作り、礼拝供養せよ」という詔を出されたことに由来するものです。

桜井　六八五年、そんなに大昔なんですね。

菅　それから千三百年以上経った現在、そのお仏壇が危機に瀕（ひん）しています。墓じまいに続いて、仏壇じまいもブームのようにさえなってしまっています。今月は、その問題を少し考えたいのですが、桜井さんにとって、お仏壇とは何でしょうか。

桜井　うちには生まれたときからお仏壇がありました。桜井家先祖代々のお仏壇で、そこに入っているのは、私のおじいちゃん、おばあちゃん、お父ちゃんにお母ちゃん、それに十一カ月で亡くなった兄です。それ以前からお仏壇はあったはずですが、私が知っている限りでは、最初に入りはったのは、おじいちゃんです。毎朝、お供えして灯りをあげてお参りするのは、子どものときからの習慣でした。

菅　今は、そのあたりまえのことがあたりまえではなくなっているのですが、最初に入りはったのは、おじいちゃんと言われましたが、やはり亡くなった人がお入りになるのが、お仏壇であるという、そんなイメージなんですね。

桜井　はい、なんかそんな気がするんです。そういうものだと思てます。

菅　それは桜井さんだけではなく、多くの人が抱いている思いでしょうね。でも、そこが僧侶側の思いとは、少し異なるんです。私たちが発信しているのは、「お仏壇は、ご先祖のお家じゃありません」ということです。

桜井　え、ご先祖のお家ではないということなんですか。おじいちゃんやおばあちゃん、小さいときに亡くなった兄が入っているのではないのですか。

菅　必ずしも間違いという

愚痴や無茶を聞いてもらいたいから

ことでもないのですが、その前に、では、おじいちゃん以前のご先祖は、そこには入っておられないのですか。

桜井　そこは、桜井家先祖代々なんですよ。会ったことはないけれど、そこに入ってはるんです。

菅　お仏壇がないお宅で、誰かが亡くなると、急いでお仏壇を求めようとされるのは、やはり早くしないと、亡き人が入る所がないという意識なんでしょうね。

ご先祖を招いてくださった親方

桜井　きっとそうなんですね。でも、先ほど、お仏壇は先祖のお家ではないと言われましたね。

菅　何よりもお仏壇というのは、尊い仏さまをご安置申しあげる所です。

桜井　ああ、なるほど。そういうことなんですね。

菅　これは宗派によって違うかもしれませんが、私たちにとって、ご本山は本願寺です。その本願寺のお内陣を小型化したのが、一般寺院のお内陣で、お寺のお内陣を小型化したものが、お仏壇だと考えているんです。

桜井　へえー、そうなんですか。

菅　その意味で、お仏壇というのは、家庭の中に持ち込まれた、小さなお寺です。お寺のお内陣ですから、中心は言うまでもなく、阿弥陀さまです。

桜井　おじいちゃんやおばあちゃん、ご先祖が入りはる所ではないということですね。

菅　そうではないというんじゃなくて、では、私にとって大事なおじいちゃん、おばあちゃんは、死んでどこに往かれたのですか。

桜井　それは悪い世界ではない、極楽やと思いたいです。

菅　そうでしょうね。では極楽に招いてくださるのは誰でしょう。それは人間じゃなく、阿弥陀さまです。だから、おじいちゃんもおばあちゃんも、お父ちゃんもお母ちゃんも、そしてお兄ちゃんも、みんなこの阿弥陀さまに救われて、極楽に往ったのだという、その形がお仏壇であり、だから主体は、阿弥陀さまなんです。

ただただ黙って聞いてくれる

桜井　その親方を忘れてはいけないということですね。でも親方にお参りするにしても、やっぱりお仏壇にお参りするときは、お父ちゃんお母ちゃん、特にお母ちゃんなんです。

菅　親方は偉すぎますからね（笑）。

桜井　そう、偉すぎるんです。やっぱり親しいのはお母ちゃんですから。

菅　これは私が若いときに、ある先生から教えてもらいました。阿弥陀さまがピンとこなかったらお釈迦さまを思え。お釈迦さまも偉い人だったら親鸞さまを思え。親鸞さまも身近でなかったら、亡きお母さんを思いなさい。それでいいんだと。

桜井　実際、阿弥陀さんに会ったことないですから（笑）。

菅　だから、お母さんを阿弥陀さまだと思えばいいんです。

桜井　それなら、私には分かりやすいです。

菅　そうすると、お父さんもお母さんも、ただの人間ではなくて、仏さまなんだという思いも出てくると思うのですが、どうでしょうか。

桜井　それは半々ですね。仏さまだと思える部分もあるし、もっと身近な存在でもあるし。仏さんの前で悩みを聞いてもらったりもしますが、誰に聞いてもらうのかと言うと、やっぱりお母ちゃんです。

菅　悩みを聞いてもらうということですが、お仏壇は、自分の悩み事や心配事、そして愚痴を聞いてもらうものでもあるんですね。今、仏壇離れの時代ですが、お仏壇がないと、その場所がない、愚痴を聞いてもらえる所がなくなるんです。

桜井　確かにそうですね。亭主はちょっと違いますし（笑）。

菅　ご亭主でも悪くはないんでしょうけど（笑）。人間は一方的に聞いてくれなくて、反発されることがありますね。

桜井　けんかになりますよね（笑）。

菅　相手が仏さまなら、どんなに愚痴を言っても無茶を言っても、ただ黙って聞いてくださいます。

分かってるよ、分かってるよ

桜井　私なんかは、昔からお仏壇がありましたから、その前で独り言をぶつぶつ言ってました。それは親に聞いてもらってるという感覚でした。仏壇があると、例えば友だちにも言えないこととか、そんなことも言えるんです。

菅　それと、これはよく言われることですが、愚痴というのは別に答えを求めているんじゃなしに、聞いてもらうだけでいいんですね。

桜井　そうです。聞いてもらうだけで、何かスッとするんです。

菅　昔のお嫁さんは、お仏壇の前で泣いたと言われますが、そんな機能を果たしてきたんです。それともう一つ、お仏壇は、そのお家のご主人なんです。

桜井　ああ、一番偉いんですね。

菅　「主人」とか、「主婦」とか言いますが、人間が主になって一番偉くなってしまうと、衝突してしまいます。

桜井　そうですねえ。旦那は、「ご主人」として尊敬しなければあかんのでしょうけど、けったくそ悪いときもありますから（笑）。

菅　誰が一番偉いのかと言えば、それはやっぱり仏さまであり、お仏壇。それでいいんです。

桜井　やっぱり存在感が違いますものね。お父ちゃんもお母ちゃんも、元々は生きてはったんですが、今はもう極楽の仏さま。そう思うだけで尊敬できますから。

菅　だから、お仏壇があるかないかというのは、家の中心があるかないかということなんです。そして、愚痴が言える場所があるかないかということですね。

桜井　そういうものがあると助かりますよね。悩み事を言うと、「分かってるよ、分かってるよ」と、言ってくれているように、気が安まりますもの。

あたりまえを負担に思う世代

菅　ところが、今の人は、何か仏壇を持つことを、負担のように思ってしまうようなんです。簡単に、仏壇を小さくしてしまうとか、なくしてしまう方向に走ってしまうんですが、それでいいのかなと疑問に思います。

桜井　私も正直、娘とそんな話をじっくりとしたことはないんですが、私の母親は昔の人ですから、よけいにそうなんでしょうけど、「あんた一人っ子やから、桜井家の仏壇はちゃんと継いでいかなあかんし、お寺とのおつき合いもちゃんとやっていかなあかん」と、子どものころからそう言われてきました。これはもう洗脳みたいなもんです（笑）。

菅　それがあたりまえの時代ですね。

桜井　だから、これはもうせなあかんもんやと思ってました。「嫁にいって、名前が変わろうが、これだけはちゃんとやりなさい」と、そんな具合でしたね。

菅　それが今までの、「あたりまえ」であったんですが、それが、そうではなくなってきています。

桜井　だから私が、母と同じことを娘に言うかどうか、言えるかどうかなんです。

菅　同様のことを悩んでる人は多いはずですよ。

桜井　それでもやっぱり、私が死んだときには、娘にはちゃんとお参りしてほしいと思います。おじいちゃんやおばあちゃん、お父ちゃんやお母ちゃんが入っている墓に、私も入りたいし、そこにお参りにも来てほしい。来なくていいとは言えません。それはお仏壇も同じです。

菅　お墓にせよ、お仏壇にせよ、目には見えないけれど、本当に大事なものの象徴なんです。大きさとか形だけが問題になって、お仏壇の意味や役割が見失われてしまっているように思います。

桜井　それに護ってもらっているんですね。そのことは親子の間で、ちゃんと言葉で伝えていきたいですね。